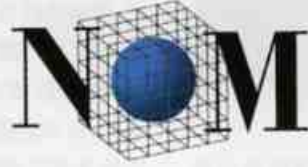


新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信



第22号

2004.4

近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展

4月24日(土)～6月6日(日)

もしも彼の存在がなかったならば、1世紀をこえるこれまでの日本洋画の歴史はいかなるものであったのか、と想像した時、あらためてその大きく浮かび上がる存在感に気づくことでしょうか。没後80年をむかえる今年、もはや歴史的な“常識”と化してしまったといえるこの「近代日本洋画の巨匠」について、その足跡を再び確かめてみてはいかがでしょうか。

この時代の多くの画家たちと同様に、黒田清輝は18歳の時にフランスへ留学しますが、それは絵画を学ぶためではなく法律を修得するためのものでした。それは、鹿児島島の島津藩士の家に生まれ、枢密院顧問官をもつとめた政治家の黒田清綱の養子として大切に育てられた青年が歩むべき当然の道であったともいえるでしょう。今回の展覧会に出品される作品で、最も年代の古いものに鉛筆による自画像があります。パリの地で法律学校の入学にむけて準備中であった頃のもので、まもなく訪れる未来、つまり苦悩しながらも己の気持ちにしたがって画家へと大きく人生の矛先を転じていくことになろうとは微塵も想像していなかったことでしょうか。そこにいるのは、明治から大正時代の洋画壇の牽引者として、まさに歴史の

王道を歩むことになる“巨匠”の姿ではなく、まだ幼さを残した法律家を目指すただひとりの青年です。展覧会では、この作品を出発点に、その後およそ40年にわたりのように画家としての道を展開していったのかを、東京文化財研究所の所蔵作品を中心に絶筆にいたるまでの油彩画、デッサン、写生帖など約160点によって展覧します。

さて、黒田清輝とって、仮に画家の名前を知らなくともどこか見覚えのある絵としてあげられるのが《湖畔》でしょう。これほどまでに広く知られた絵画とそれを描いた画家黒田清輝ですが、果たして私たちは彼についてどれほどのことを知っているのでしょうか。歴史的な業績はともかく、この《湖畔》やその他の重要文化財に指定されるような代表作を除いてどのような絵を描いてきたのか、一見知られているようでありながら実はあまりよく知られていない、というのが本当のところではないでしょうか。

新潟では実に30年ぶりの開催となる黒田清輝展。薰風かおるこの季節、どこか懐かしさを覚える名画《湖畔》と再会するのによし、いつか学校で習ったであろう美術の歴史を復習するのによし、もちろん初めて見開するの

ルーヴル美術館展 中世フランスの秘宝

7月10日(土)～9月12日(日)

じつによく出逢ったものだ 石の寺のマリアに／壁に貼りついた聖人たちに
—— 多田智満子「フランスでわたしは」

今夏、ルーヴル美術館展がいよいよ長岡で実現することになりました。11世紀から15世紀末にかけてフランスで繁栄したキリスト教美術の精華を、合わせて約110点の作品によって紹介します。日本国内では殆ど触れる機会がなく、神秘のベールに包まれてきた中世という時代の魅力を余すところなくお伝えしようとするものです。

今からおよそ1000年前の南ヨーロッパで、ロマネスクという教会建築の様式が誕生したといわれています。修道院の重い石組みによる天井（それ以前は木造天井でした）を支えるためには、壁は厚く頑丈でなければならず、自然に窓が小さくなり、修道院内部に暗い瞑想的な空間が生まれることになりました。聖堂内の支柱、あるいは中庭を囲む回廊の柱の上部には、聖書の人物や空想上の動物の姿が刻まれました。今回出品されるそうした柱頭の一つには、聖母マリアがエリザベトを訪問する場面が表されていますが、四頭身にデフォルメされたマリアは愛

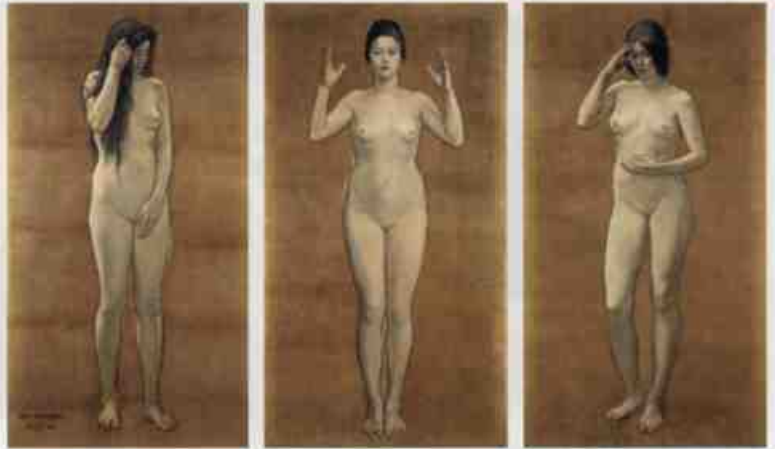
らしくユーモラスな印象を与えます。この独特の様式化によって、神の超越性や人間の微小さがクローズアップされ、現代の私たちにも力強く語りかける表現となったことが分かります。

一方、12世紀後半になると新しい建築工法が飛躍的に発展していきます。いわゆるゴシック様式の始まりです。大聖堂の時代といってもよいでしょう。聖堂上層の重量を巧みに分散させる飛梁や尖頭アーチが生まれ、もはや壁全体の厚さで天井を支えるの必要がなくなり、壁面に大きな窓や開口部を穿つことが可能になりました。美しいステンドグラスで知られるパリのノートル・ダム大聖堂やシャルトルの大聖堂はこの時代に建造されたものです。彫刻の分野にも変化が現れました。観念的なものからより写実的で人間的なものへと表現が移行し、優美な丸彫りの人像柱が大聖堂の正面を飾るようになりました。出品作の一つである天使の像は、優しく腰をひねったボー

もよし。いずれにせよ、まぎれもなく“巨匠”に登りつめた画家の足跡を作品とともにたどることで、きっとそれぞれに新しい「黒田清輝」の発見がそこには待っているはずです。
(主任学芸員 澤田 佳三)



《湖畔》 1897年 東京文化財研究所蔵（重要文化財）



《髻・帯・柄》 1899年 東京文化財研究所蔵（重要文化財）

ズで立ち、顔には明るい微笑を浮かべています。
今回の展覧会ではロマネスク様式からゴシック様式を経て、さらにルネサンス時代を迎えるまでの彫刻作品と工芸作品を年代順に4章に分けて展示構成しています。建築とともに生まれた中世の美術は、本来現地を訪れることなくして鑑賞することは困難であるといわれています。しかし、中世という時代と地域性をほぼ網羅しているルーヴル美術館の豊富なコレクションによって、フランスに実際に出かけて行くよりもむしろ充実した中世への巡礼の旅が、見る人に約束されているといっても決して言い過ぎではないでしょう。

(主任学芸員 平石 昌子)



《聖母子抱 聖母訪問》 12世紀半ば 柱頭



《王冠を捧げる天使》 1297~1304年



《ワシメトの冠をつけた王冠杖》 1210~1220年頃



《牧草集納のあるクビスリー》 15世紀後半

平成15年度 新収蔵品

〈世界の美術〉

版画

- ◆エドゥアール・ヴェイヤール
版画集《風景と室内》(13点組)
1899年刊行 カラーリトグラフ

ヴェイヤール《風景と室内》より
「チェスの勝負」



〈日本の美術〉

日本画

- ◆尾竹竹坡《梧桐》1911年
紙本彩色、六曲一双屏風
- ◆尾竹国親《巴》1930年
絹本彩色



尾竹国親《巴》

◆林潤一

- 《緑韻蓆々》1985年
紙本彩色
- 《罌粟花(春)》1998年
紙本彩色
- 《山百合(夏)》1998年
紙本彩色
- 《鶉冠花(秋)》1998年
紙本彩色
- 《冬牡丹(冬)》1999年
紙本彩色

◆大野俊明《宵の星》1999年

岩絵具、水干絵具、墨、麻紙

◆八木幾朗《魚図》1980年

岩絵具、墨、銀箔、紙

◆斉藤典彦《Rites of Passage》2000年

岩絵具、膠、雲母、麻紙、パネル

◆岡村桂三郎《泉》2003年

岩絵具、板

◆日高理恵子《空との距離Ⅱ》2002年

岩絵具、麻紙

◆菅原健彦《円形のジャングルジム》

1993年 箔、岩絵具、顔料、膠、木製パネル

洋画

- ◆中村一美《死を悼みて濡れた紫の水溜りに立つ者V》
2003年 アクリル、綿布

◆福田美蘭

《ふれちゃった写真(アムステルダム国立美術館)》

2003年 アクリル、パネル

《ブッシュ大統領に話しかけるキリスト》

2002年 アクリル、パネル



福田美蘭《ブッシュ大統領に話しかけるキリスト》

平面

- ◆森村泰昌《Death of Father》1991年
カラー写真に透明メディウム

彫刻

- ◆舟越直木《Chuckwil's Widow》
1993年 ブロンズ

工芸

◆宮田安平

《縞絵》1979年 蠟型鋳金、白銅

《終りのない物語「月下独酌 唐・李白に捧ぐ」》

1991年 鋳金、アルミニウム、アクリル、黄銅

《終りのない物語「世阿弥の流人箱」》

1993年 蠟型鋳金、アルミニウム、プラスチック、縄他

《ペンダント 海の城》

1980年頃 蠟型鋳金、銀、真珠

《指輪 美豆波乃女》

1980年頃 蠟型鋳金、金

《指輪 美豆波乃女》

1980年頃 蠟型鋳金、金

《指輪 美豆波乃女》

1990年頃 蠟型鋳金、金

《ブローチ 花籠》

1980年頃 蠟型鋳金、銀

《伝承》

1968年 鋳金、アルミニウム

《ブローチ 秘境》

1980年頃 蠟型鋳金、金

《指輪 夜もすがら》

1980年頃 蠟型鋳金、金

《ペンダント お話》

1970年頃 蠟型鋳金、銀

《ペンダント 銀の蕨》

1990年代 蠟型鋳金、銀

《ペンダント 思ひ思ひに》

2000年頃 蠟型鋳金、銀

《指輪 美豆波乃女》

2003年 蠟型鋳金、金

《指輪 美豆波乃女》

2003年 蠟型鋳金、金

デザイン

- ◆仲條正義《仲條のフジのヤマイ》
(36点組)

2002年 印刷、紙

素描

- ◆土田麦穂《巴里の女スケッチ》

1922~23年頃 鉛筆、紙

資料

- ◆亀倉雄策 関連資料(4箱)

- ◆仲條正義《仲條のフジのヤマイ》
(32点組)

2002年 印刷、紙

〈新潟の美術〉

日本画

- ◆岩淵芳華《理科室》1940年 紙本彩色
- ◆長谷部権次呂《河岸の家》2002年 紙本彩色
- ◆徳荆春雄《大河渡る》2002年 紙本彩色

万代島美術館情報

所蔵品展1

- 横山操と横の会の男たち

(開催中~5月5日)

- ディック・ブルーナ展

(5月11日~6月13日)

開館1周年記念特別展

- 大英博物館の至宝展

(8月26日~8月29日)

東京で50万人が見た展覧会が
ついに新潟にやってくる!

The Niigata Bandaijima Art Museum 新潟県立万代島美術館

〒950-0078 新潟市万代島5-1
(栄町メッセ内 万代島ビル5F)
TEL:025-290-6655 FAX:025-249-7577
ホームページ www.lalnet.gr.jp/banbi/

所蔵品展示室より

第1期:3月31日(水)～6月20日(日)
第2期:6月22日(火)～9月26日(日)

美術館の所蔵品展示は「いつも同じ作品ばかり」「企画展のオマケ」といったイメージを抱かれがちです。当館では、所蔵品にもっと親しみを感じていただけるよう、展示の仕方にいろいろな工夫を凝らしています。

そのひとつは、当館で重点的に収集している作家の「特集展示」です。今年度上半期には、佐藤哲三(第1期/展示室3)、土田麦僊(第2期/展示室1)、前田常作(第2期/展示室2)、そしてデューラー(第2期前期/展示室3)の特集を予定。なかでも今年、没後50年をむかえる佐藤哲三の展示にはぜひご期待いただきたいところ。目玉となるのは、新潟では9年ぶりとなる晩年の大作《みぞれ》(個人蔵)の特別展示で、長年哲三の足跡を追い続けてきた小見秀男学芸課長は、「《みぞれ》には、新潟で生きた作家のすべてが表れている。今回の特集展示は作家へのオマージュとしてぜひとも実現したかった」と、開催への思いを語っています。

それから、テーマに関連する多彩な作品を集めた「テーマ展示」。これは、所蔵品の中からびったりの作品を選び出す学芸員の腕の見せどころともいえるでしょう。「素材と表現—紙・ガラス・金属—」(第1期/展示室1)では、素材の特性を生かした作品をご紹介します。「明治・大正の洋画」(第1期/展示室2)は、黒田清輝展に合わせ、黒田と同時代の傑作を多数展示するもの。「手わざと祈り」(第2期後期/展示室3)ではルーヴル美術館展に因み、精巧な工芸作品と祈りをテーマとする彫刻を展示します。

わたしたちは、来館される方々に「あの作品に会いに来た」と言ってもらえるような魅力的な所蔵品展示をめざしています。

(美術学芸員 長嶋 圭哉)



佐藤哲三(みぞれ) 1952～53年(個人蔵)
※「特集 没後50年 佐藤哲三」第1期/展示室3



佐藤哲三(春の日のマリア) 1980年
※「手わざと祈り」第2期後期/展示室3
第1期も同様に展示します。



アルブレヒト・デューラー(メレンコリア1) 1514年
※「15から18世紀★伝説的の版画—デューラーを中心に」第2期前期/展示室3

●表紙作品解説

宮田 宏平(指輪 美豆波乃女) 1980年頃(昭和55頃)
3.0, 6.5×3.0cm/銅型鍍金

くるくるとなめらかに伸びる金色の線と、ところどころに輝く丸い粒。清く澄んだ流れに住む「水の女神」をイメージして作られたこの不思議な形をしたものは、指輪です。指にはめると、その曲線は手首に向かってまるで生き物のように手の甲をはっていき、女性の手をよりしなやかに見せます。手から外してテーブルの上にそっと置けば、自分だけに語りかけてくれる小さなオブジェとして、そのかたちを心ゆくまで眺めて飽きることがないでしょう。この指輪には、そのような楽しみも秘められているのです。

下半期
展覧会案内

落谷虹児展—少女達の夢と憧れ—
2004年10月9日(土)～11月23日(日)

県民の美の財産Ⅱ

日本美術の歩み～近代から現代へ～
2005年1月25日(火)～3月21日(月)

利用案内

■開館時間 午前9:00～午後5:00

※観覧券の販売は午後4:30まで

レストラン/午前10:00～午後5:00

※ラストオーダー(食事) 午後4:00

(飲物) 午後4:30

ミュージアムショップ/午前9:00～午後5:00

■休館日 毎週月曜日

※ただし月曜が祝日の場合は閉館し、翌日休館。

※5/3日は閉館し、5/4日は休館。8/25日、8/16日は閉館。

※9/27日～9/29日、12/24日～1/3日、3/28日～3/31日の各期間は休館。

■観覧料金

・企画展

企画展によって観覧料が異なります。

なお、企画展観覧券で、展示室1・2・3もご覧いただけます。

・展示室1・2・3

●一般/410円(330円)

●中等教育(後期)・高校・高等専門学校・大学/200円(160円)

※学生証を提示してください。

●小学・中学・中等教育(前期)/100円(80円)

※1)内は20名以上の団体料金です。

※小・中学生は土・日・祝日の観覧料が無料になります。

THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館

〒940-2083新潟県長岡市宮前町字居根278-14
TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115
http://www.lalinet.gr.jp/kinbi/index.html
e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

2004.4.1発行 6,000部

「運慶の署名」

ロマネスクの時代、12世紀に建立されたオータン大聖堂（フランスのブルゴーニュ地方）のタンパン（門口上部の半円形小壁）の浮彫り「最後の審判」のキリストの足元に「ギスレベルトゥスこれを作る」という作者の銘が刻まれています。ロマネスク彫刻では作者の名が記されている例がありますが、その大部分は「誰某が我を作る」という書き方で、作品自体が生命を持つ主体的存在であることを示していました。古代ギリシアでもその例が見られます。その点でオータン大聖堂の銘文は大変珍しいのですが、やがて彫刻に自然主義的傾向が強まるゴシックの時代に入るとこのような銘の記し方は一般的となりました。そこに彫刻が生命あるものとしての主体性を次第に失い、一方作者の意識の上でも自己の主張が芽生えてきたことを物語っています。

実は日本の仏像の銘文の上でも、ほぼ同じ時期に似たような現象が起りました。運慶が若い時代に造った奈良円成寺の大日如来像は台座の銘文の後半部分に安元2年（1176）10月に完成したと記され、さらに「大仏師康慶／実弟子運慶／（花押）」とあります。花押は別の文書に見える運慶の花押と同一のもので、この部分は運慶自筆、つまり署名と考えてよいものです。このような署名は平安時代の造像銘記の歴史の上で初めてのことでした。

この時期の造像銘記には、ふつう造像発願の趣旨、願主や結縁者の名、造像の次第や年月日などが記されますが、そこに製作者である仏師の名が記されることもありました。これらの銘記は発願者の立場から記されるもので、そこに仏師の名が記されるかどうかは、発願者と仏師との社会的な地位関係によったようです。つまり仏師が発願者より下位の場合には仏師の名は記されず、仏師が発願者と対等またはそれ以上の場合にその名が記されたのです。もちろん仏師にも地位の高い、低いがあり、仏師と発願者の社会的地位関係は相対的なものですが、上級貴族による造像では仏師の名が銘記や願文の中にあられることは当然ありませんでした。

ただ一つの例外があります。京都大覚寺の五大明王像の一体の台座銘に、安元2年（1176）に七条殿弘御所で造り始めたこと、法眼明円が造進したことが記されています。七条殿は後白河法皇の御所ですから発願者は後白河という上級貴族の親玉です。明円は京都のいわゆる円派仏師で、上級貴族発願の仏像に仏師名があらわれた当時唯一の銘記といえます。しかしここで注意すべきなのは銘記に「法眼明円造進」とあることで、造進とは造って寄進すること、当時しばしば成功（じょうごう、買官）の一形態として行われ、院政期には仏師による造進の記録が多く見られます。それにより社会的地位の上昇や、院との結びつきを深めて造進の発注を期待したのです。

新潟県立近代美術館長 水野 敬三郎

この銘記では明円は作者としてでなく、寄進者として名を記されたと解するべきでしょう。院政期における明円のような京都仏師の姿勢をよく示すものであり、ちょうど同じ年の円成寺大日如来像に見る、作者の自己主張につながる運慶の名のあらわれ方はこれとまさに対極的なものといえます。

運慶は、興福寺に仏所をおく奈良仏師の一員でした。京都に仏所をおくいわゆる円派や院派の仏師が院や平家を含む宮廷貴族と関係が深いのに対して、奈良仏師はその結びつきがむしろ弱く、興福寺やその支配下の寺、僧侶のための造仏に多くたずさわっていました。興福寺の衆徒は、彼等の利益に反することがあると春日神木を奉じて入京し、強訴を繰返して中央権力にゆさぶりをかけていました。やがては平家政権と対立して、平家の軍勢による南都焼打ちを招くこととなります。奈良仏師がそのような雰囲気の中で造仏したことは、おそらく当時支配的であった定朝様式という権威への反逆につながったのでしょうか。そのような気概が仏像への署名を導いたとも考えられます。

これ以降、ことに鎌倉時代に入ると、仏像への仏師の署名は一般化してきました。個人作家としての意識が生れてきたことを物語り、鎌倉時代の仏像にさまざまな個性的作風が生れてきたこととも相応じています。その表現において写実に向かったこともゴシック彫刻の場合と比べて興味深いことです。



円成寺大日如来像・台座部（部分）

館長による美術史連続講座

（聴講無料／講堂にて）各土曜日、午後2時より（予定）

第1回 9月11日 第2回 10月16日 第3回 11月13日